

『篁山竹林寺縁起』における篁説話の位相・統考

——小野篁の造型をめぐって——

森 下 要 治

はじめに

説話世界の小野篁といえ、多種多様な伝説を纏った人物である。しかしいまその多彩を述べようとするのではない。広島県東広島市河内町入野の篁山竹林寺（真言宗御室派準別格本山）に伝存する『篁山竹林寺縁起』（以下、『竹林寺縁起』）に描出される小野篁がいかなる論理の下に造型されているか、明らかにしようとするばかりである。過去の論稿¹⁾で幾度か述べたが、『竹林寺縁起』の基礎的な事柄について、まず確認しておく。

『竹林寺縁起』は紙本著色上下二巻の絵巻である。縁起を紹介された友久武文氏²⁾によれば、室町時代末期頃までには成立していたものと推定される。広島県重要文化財に指定された本縁起は天地二十九・五センチメートルで、和化漢文の本文が上巻十四、下巻十三の絵によって分かたれている。この、絵によって分かたれた『竹林寺縁起』の内容を左に示す。

〔上巻³⁾〕

- 1、当山の地勢。
 - 2、行基による桜山花王寺建立と繁栄。
 - 3、八千代の千日詣でと不思議の夢見。
 - 4、千日満願の帰途、竹の子との嫁ぎ。
 - 5、篁の誕生、その異能と学才。
 - 6、八千代の主・竹野辺の妻の憎悪、篁の旅立ち。
 - 7、篁上洛、万の道に秀才の誉れ。
 - 8、学徒との諍い、篁、西三条関白家への聳入りを決意。
 - 9、篁、謎立ての申し文により求婚。
 - 10、関白と篁、謎の応酬。
 - 11、篁聳入りの出で立ちと世間の羨望。
 - 12、篁能芸の誉れと嵯峨天皇の重用。
 - 13、「無悪善」「一伏三仰」の謎解き。
 - 14、渡唐、白楽天との邂逅。
- 〔下巻〕
- 1、関白・良相の頓死。

- 2、良相地獄巡り①八大地獄。
 - 3、良相地獄巡り②八寒地獄。
 - 4、良相地獄巡り③四種の増地獄。
 - 5、良相地獄巡り④孤独無量の地獄。
 - 6、冥官・宋帝王、良相に大般若經書写を示唆。
 - 7、良相蘇生、宋帝王は小野篁なりと知る。
 - 8、大般若經書写・供養、篁「明鏡」云々の詩を詠む。
 - 9、良相、娘に地獄語り、篁は冥官なりと明かす。
 - 10、篁、六道の辻より地獄へ帰還。
 - 11、化僧、花王寺に出現、地藏十王像九体を彫る。
 - 12、化僧姿を消して十王像揃う、人々、篁なりと知る。
 - 13、寺号改め篁山竹林寺の繁昌と人々の尊崇。
- 以下、『竹林寺縁起』本文の引用箇所は右の一覧により、「上」「下」の如くに示す。

一 学問／謎立てと篁

故郷を離れ上洛して研鑽を積む篁だが、都人士の目に彼の姿はみすばらしく映るばかりであった。彼を侮る学徒との間に、諍いは起こる。

抑篁雖才藝勝他、貧道天下第一也。或時学徒嘲

云、御辺未持妻女、故狩衣々装見苦敷様也。関白姫
君社成齡十六、給是望為女房、給謂覺、光陰可惜、
時不待二人云古詞引、而作詩通覺。

人無更少時須惜

年不常春酒莫空云々

言無益言葉易過時自送、汝等為營事云也。

学徒等猶此語不聞、重而咲覺、篁言、出左者成
彼聾云。其時同音笑而聾入之時、我等御辺取履

云々。

（『竹林寺縁起』上8、原漢文）

学徒らの挑発に漢詩で応えようとする篁に対して学徒らの反応は「嘲りて」「咲ひければ」「同音に笑ひて」とエスカレートするばかり、という場面である。引用文中「古き詞」が世阿弥作とされる謡曲「高野物狂」他に見えるものであること、またこれを踏まえた漢詩が『和漢朗詠集』上

「春」所収の著名なものであること、さらに「言るは」以下に示された「無益の言葉に過ぎ易き時を送らんより、汝等が営む事を為せ」との大意がいわゆる朗詠注の内容と共通の脈絡を抱え込んでいることについて、すでに前稿で論じた⁽⁵⁾。一見、篁が笑いの標的となつていようだが、学徒らが篁を嘲り笑うほど読者が学徒らを笑いの俎上に乗せる仕掛けである。これだけが語られれば、篁と学徒らの学問水準の開きが自ずと浮き上がる。

関白家への簪入りを約束させられた篁は、申し文を手に西三条関白家に向かう。

然間至^ルニ彼関白御所^ノ、而子細^ヲ云入^ヒ、無^シ申次^ヲ

人^一。時^一剋移^ル迄^テ而^レ庭^ニ上^リ立^テ。折^レ節^大一^ニ臣良相^立出^テ見^ル給^ヒ

梟^レ、立^テ文^ヲ持^テ、童^子、去^ル躰^ニ、地^上三^尺斗^拳、空^ニ居^ル梟^一。

非^ニ畜^ト人^ニ思^ヒ、問^ニ子細^ヲ、奉^ル彼^ノ状^ヲ。即^チ披^キ見^ル給^ヒ、其^ノ詞^ニ

云、「冬^ハ弘^テ宵^ニ蛾^カ燈^シ、勤^ク切^ク、夏^ハ向^テ藜^ノ藿^ノ儀^ニ思^ヒ深^シ。並^ニ而^レ

右^七七^七横^山逆^出」云々。是^レ篁^ハ明^テ蛩^ノ雪^ノ鑽^ノ仰^ノ之^ノ勤^深、

而次造^ニ婦^ト云^フ文字^ヲ侍^リ。大臣思^ハ、様^ハ、吾^レ姫^君於^テヨメニ
給^ト日^ト儀^ト覚^ス、則^チ扇^ヲ取^リ直^シ、虚^ニ空^ニ書^ク。龍^ノ云^フ文字^ヲ。篁^ハ念^フ様^ハ、
是^レ立^レ月^ト己^ト巳^ト日^ト来^レ言^フ、返^答得^ル意^ト。

(『竹林寺縁起』上10)

宙に浮かび上がって引見の機会を待つ篁の様子にその異常性を察した良相との、謎の応酬の場面である。引用文中、篁の申し文の「冬…夏…」の部分が『本朝文粹』巻第七所収の篁奏状「奉^ニ右大臣^ニ」の表現を不完全に借用していること、また「並^ニ而^レ右七左七横山逆出」が、一部表現に異同を生じつつも中国宋代の莊綽撰『雞肋編』上巻に見える古い謎立てであることは、すでに前稿に指摘している⁽⁶⁾。こうした典拠ある言葉を挟んで、関白良相と篁は相對峙している。互いの発する謎に対して「大臣思^ハ、様^ハ」「篁^ハ念^フ様^ハ」とほぼ同様に反復される二人の反応は、この両者がこの文脈の中で置換可能な学才を有することを明瞭に示す。

こうして、並みの学徒らの及びもつかぬ篁の学才は、衆愚を遙かに見下ろしつつ、時の一人に比肩しうるものであることが示される。周囲から屹立する篁の存在感を学問／謎立てによってくつきりと象るこの描き方は、学問・謎立てが本来有する競技性あるいは遊戯性をよく心得たものと言えるだろう。この意味において、学問／謎立ては、

篁を常人と差異化するための装置であつた。

二 白楽天と篁

関白の聳となり帝の信を得た篁に『竹林寺縁起』は、白楽天との出会いを準備している。

如^レ此^{コト}不^レ讀^{コト}万^{コト}讀^{コト}、不^レ知^ル万^ル知^ル賢^才成^レ、任^ニ文

章博士^ニ、度々唐使渡^ル。或^レ時对^ス白楽^ニ。白語云^テ、「篁

雖^レ為^リ才人^ニ不^レ及^ニ李嶠^才智^恵」云^ハ。于^レ時即^チ篁^氣色^悪

敷^{シク}、「李嶠^カ一期^一詩^一被^レ出^ヲ、見^申」。其^ノ時^此詩^ヲ出^ス。

「野^ノ草^芳非^テ紅^錦地^チ 遊^絲繚^乱碧^羅天^ニ」云^テ詩^ヲ出^ス。篁

見^レ之^ハ、「我^ハ是^ニ三^倍勝^テ可^レ作^ク」云^ク。「然^者当^座作^リト」云^テ、

硯^懷紙^出。篁^不移^レ時^詩作^ル。其^ノ詩^曰、

「着^テ野^展敷^紅錦^繡、当^ハ天^遊織^碧羅^綾」書^ク。楽^天

口^閉、暫^ク在^云、「是^ハ錦^上加^レ繡^ニ、羅^上加^レ綾^事

神^妙也^ト。感^ス無^限。其^外於^ニ唐^朝、名^譽不^レ知^ニ

数^一。故^ニ振^ニ才^藝於^和漢^ニ、布^名望^於天^下。希^代不^思儀^ト

仁也。斯^送日^月勝^テ世^綺羅^之人^ニ、其^家榮^給侍^ト。

(『竹林寺縁起』上14)

文章博士に任じた篁がたびたび唐に渡り、白楽天と出会つたという部分である。周知のとおり篁は終に渡唐の機会を得なかつたので、すべて史実とは異なる。例えば『古事談』巻第六・三三二には、篁と白楽天の関わりを次のように語る説話が見える。

小野篁、遣唐使に渡ると聞きて、白楽天悦びて望海楼を構へて待ち給ひけるに、みえざりければ、「太政官符露点雖明、小野篁舟風帆未見」と書かれり。

類例は『江談抄』にも見え、篁の渡唐を白楽天が待つたというこの話柄は、『竹林寺縁起』のような話に成長する前段階とも言えそうだが、彼我の開きはなお大きい。従つて課題とすべきは、この話が何によるものか、またこの話を手繰り寄せた意図は何かを、より踏み込んで明らかにすることに絞られる。引用される二つの詩句が手がかりとなるが、言うまでもなくこれら二句は、『和漢朗詠集』上・春興

に取められたものである。これらの詩句に絡み付いて伝承された次の言説に注意しなければならない。

まず「野草芳菲」の句は、『竹林寺縁起』では李嶠の作として話が進むが、実際は劉禹錫の作である。これについては例えば書陵部本『和漢朗詠集私注』の、同句に付された次のような注釈が注意を引く。

百詠^二曰、花明^{シテノミチナリ}春^ハ径^ニ紅^ク。

ここに言う「百詠」とは『李嶠百詠』⁽¹⁾を指すものである。劉禹錫の詩作の注に「李嶠」を連想させる語が含まれたことで、『竹林寺縁起』のような話柄との接点が生まれたものと見ておく。

いわゆる朗詠注は、他にも次のような情報を提供してくれる。篁作とされた「着野」の詩句の注釈である。

此詩ノ意ハ、上ニ、野草芳菲ト云ヘル詩ノ意也。文選、イマタ此朝ニ、ワタラサリケルトキ、篁カツケル詩ノ、三首マテ、文選ノ詩ニ、ツクリアハセタリケルコソ、篁カ、コノ道ニイタレルコトハ、アラハレケレ。遊織トイフコトハ、春ノソラニ、遊糸ミタレトヒテ、ミトリノアヤヲ、リイタセリト云也。

右の引用文に、篁「着野」詩と劉禹錫「野草芳菲」詩とが「詩ノ意」を同じくするという両者の接点を見出すこと

(『和漢朗詠集永濟注』)

ができる。二つの詩句は、このような文脈の中で共通項が見出されていったのであろう。ただし、詩意の注釈として考えると、傍線部を省いて考えるほうが効率的である。一見不要な傍線部が注釈の間に割り込むように記されるところに、この情報に認められた価値が透けて見える。篁の存在は、大陸の文化に比して捉えられているのである。またさらに篁「着野」詩については、次のような踏み込んだ注釈も存する。

遣唐使ノ時、白居易^{具シテ}、劉錫^カカ柄^ヲ見^セ玉イケルニ、即事^ニ此^ヲ作^テ遣^ス、秀句也。著野^ト、野^ヲ見^レトハ也。心^ハ、野辺^ニツイテ見^レハ、サマ^クノ花サカンナレハ、錦ノヌイモノヲ展敷^{クニ}似^{タリト}也。サテ、天^ヲ見^レハ、糸遊、アヲキウスモノ、アヤヲ織^{ルニ}似^{タリト}云々。篁意^ハ、野^ヲ見^レハ、色々ノ花、錦^ヲ敷^クコト自^ラ也。天^ヲ見^レハ、イトユウ乱満^{シテ}、アヤヲ、ル如^{クニ}シテアリ。何^ゾ、此処^ニ春^ヲ留^メヤト作^ル也。白居易、管領スルコト勿^ク作^ル、同心也。篁^ハ、入唐ノ時、楽天^ト合^{シテ}作文^{ナリ}、方々^ニアル也。

(広島大学本『和漢朗詠集仮名注』)

傍線部は、篁が唐に渡って白楽天と出会い、劉禹錫の家を訪ねて詩作した、というものである。これとほぼ同様の注釈は、書陵部本『朗詠抄』にも見えている。ここも、詩句の解釈だけならば傍線部は不要のはずである。注釈の初めと終わりにわざわざ繰り返されるところに、篁渡唐説の

根深さとそれを必要とした『竹林寺縁起』の構想の特異性を見るべきかも知れない。『竹林寺縁起』に篁が白楽天と出会う話が見えることについて、かつての別稿で、篁も白楽天もともに文殊菩薩化身説が囁かれる人物であることをその理由として説明したが、これら朗詠注は、篁と白楽天の出会いをもっと直接的に説明する材料となるであろう。

こうして篁と白楽天を並べる営為を可能とするレールが『竹林寺縁起』の外側に敷かれていることが確認できる。再び『竹林寺縁起』本文に戻る。

楽天口一閉、暫在云、「是錦上加^{ヌヒモノヲウスモノ}、羅上加^ヲ

綾事神妙也」。感無限。其外於唐朝、名譽不^レ

知^二數^一。故振^ニ才藝於和漢^ニ、布名望於天下^ニ。希代不

思儀仁也。斯送日月^ヲ勝^テ世^一綺羅之人^ニ其家榮給侍。

（『竹林寺縁起』上14）

篁の詠み出した詩句に白楽天が言葉を失う場面以降の再掲である。白楽天は、かつて関白良相が篁と謎を交わした折と同じように、篁の作意をびたりと言い当てる。こうして、本邦では関白良相と、中国においては白楽天と、篁の「才藝」は比較され、類同性が見出される。しかし同時に

「和漢」両方に優れた唯一人として、その存在の孤高も際立つこととなっているのである。

三 冥官説と篁

篁の造型をいっそうよく特徴づけるのは、いわゆる冥官説であろう。『竹林寺縁起』においても、やはり篁は地藏十王の一・宋帝王（『縁起』では「宗帝王」と表記）として描かれている。

関白良相が頓死し、地獄に至る。地獄巡りの後、良相の許に「第三冥官宗帝王」が現われ、次のように教える。

汝者於^ニ娑婆^ニ雖^モ三^ニ在^一大般若経書写願^ヲ未^ダ果可^シ言^フ。

（『竹林寺縁起』下6）

教えられたとおりに申し述べ、蘇生することを得た良相であったが、教えてくれた冥官は「我^ガ聳^リ小野篁^ニ」であったという。

去程彼大王良相語曰、「吾^ハ是雖^モ為^リ第三冥官^ニ、為^ニ

衆生濟度^ニ飯^ニ而為^ス再誕^ニ、為^ニ下万民於度^ニ者^一、田舎

之賤女結^テ縁^ヲ而定^ム悲母^ト、為^ニ上天於利^ニ汝^ガ結^テ縁奉^ル

主君仕。依^レ之昼^一夜^三時覺^一遊^ニ在^テ娑婆^ニ而利^一益^一一切
衆生^一、三時安^一寢^ニ還^ニ冥途^ニ裁^ニ斷^ス罪業^之輕重^一、吾悲

願如^シ此^一。② 只^ニ此事^ヲ穴賢^ニ於^テ娑婆^ニ不^レ可^レ漏^ニ三語^一、

深約束^{クシ}仕^ヒ覺^リ。

〔竹林寺縁起〕下7)

宋帝王が閔白良相に語つた言葉には、慎重に耳を傾けるべきであろう。まず傍線部①には、小野篁としての生が、いわゆるやつしの姿であると語られている。地獄の「大王」が「吾^ハ是^レ雖^モ為^リ第三^ニ冥官^一、為^ニ衆生^ニ濟度^一飯^ニ而^ス為^ニ再誕^一」と語るこの言葉は、地獄の大王が娑婆世界に身をやつしたことを如実に示す言い回しといつてよい。これはこの後の下10において、妻である良相の娘に正体を知られる場面での篁の言葉で、次のようにほぼそのまゝ反復される。

吾^ハ是^レ雖^モ為^リ十^ニ天^ノ之^ニ大王^一、為^ニ度^ニ衆生^一如^シ此^一為^ニ再

誕^一、今^ニ鄙^ニ小^一國^ノ之^ニ臣^ト謂^レ事^口惜^カ鬼^物哉^一。

特に二重傍線部は完全に表現が一致し、受け手に強く印象付けられるはずである。また「衆生濟度」「度衆生」と繰り返し語られる冥官篁の再誕の目的は、『竹林寺縁起』が必

要とした小野篁像に直接するものと言えるであろう。さらに「口^ノ惜^カ鬼^物哉^一」という表現には、やつしの裏返しとして、異界の王の矜持がはつきりと示されている。

加えて、傍線部②がやがて破られることが確実な禁忌の提示であることも明白である。いわゆる「見るなの座敷」である。禁忌が犯されれば篁が元の世界である地獄に戻らねばならぬことは、いくつもの著名な昔話や物語を類例として引くまでもなく、読者には了解される。

宋帝王が閔白良相に語つた言葉は、異界からやつしの姿でこの世界に現われ、孤高の存在として振る舞い、その孤高ゆえに、正体が露見すればこの世界を追われるように去っていく篁の姿を浮かび上がらせる表現であった。上洛したばかりの篁が「貧道天下第一」という理由で仲間の学徒から嘲笑され挑発されるという姿もやつしの典型であり、それが排除の論理を生み出していると言つて差し支えない。さらに物語を冒頭近くまで遡れば、申し子として誕生した篁が上洛を決意するのも、未通の母八千代の竹野辺との密通を疑つた、竹野辺の妻の嫉妬によるものであった。

去^ル程^ニ、彼^ノ竹野^ノ辺^ノ殿^者、雖^モ為^ニ天^ノ下^ノ之^ニ奴^子一、愛^敬誠^ニ

不^レ斜^一。然^ル、処^ニ竹野^ノ辺^ノ之^ニ女房^一（云^ニ為^ニ既^ニ彼^ニ女^一生^ニ不^レ犯^一之

者乍^ト云^ク名^ケ非^シ情^シ之^ヲ筭^ヲ父^ト、生^モ一^ノ子^ト事^ト不^レ思^ハ儀^ト成^シ、
秀識^ス寵^ス愛^ス之^ヲ給^レ恠^レ耶^ト作^ル嫉^ル妬^ル思^フ乎^ト、或^ル時^ニ彼^ノ筭^ニ雖^モ欲^ス
為^シ毒^ヲ害^ス、自^リ元^ノ再^レ來^ル之^ノ人^ナ成^ス者^ハ不^レ能^ス一^ニ服^ス終^ニ此^ノ旨^ヲ恨^ム
給^テ而^テ十二^ノ歲^ニ剋^キ彼^ノ鄉^ヲ立^テ出^テ指^テ東^ヲ登^リ給^テ侍^ル。

〔『竹林寺縁起』上6〕

「筭を父として生まれてくるはずがない、八千代の生んだ子を夫があればほど可愛がるのは、夫と八千代が通じていたからであろう」という卑しい判断（平凡な人間にとつては常識的な判断と言えるかも知れない）に基づいて命を狙われ、故郷を追われることになる。

こうして確認してみると、『竹林寺縁起』の筭一代記は、筭と平凡な人間との溝が確認された上で、排除に始まり排除に終わる物語であつたと言へべきかも知れない。

おわりに

『竹林寺縁起』で一代記の如くに語られる小野筭の説話を眺めてみると、一貫した論理を認めざるを得ない。個々の説話に纏わりつく背景や来歴、変容等の要因は右に述べたとおりであるが、それ以上に、『竹林寺縁起』がこれらの説

話を選び採った理由がはっきりと浮かび上がってくる。それは筭を「まれびと」として造型するというものだったはずである。

よく知られているように「まれびと」の概念は折口信夫が提唱したもので、その「国文学の発生（第三稿）」には次のようにごく簡潔に説明されている。

つとりばやく、私の考へるまれびとの原の姿を言へば、神であつた。第一義に於ては古代の村村に、海のあなたから時あつて来り臨んで、其村人どもの生活を幸福にして還る靈物を意味して居た。

（『折口信夫全集』第一卷¹⁵）

異界からごくまれに訪れることのある神等の靈物（尊者）である。また例えば昔話に関して、『日本昔話事典』では次のようにも説明している。

村外から訪れる神を歓待した村人がよき報償を受けるモチーフ。しばしば訪れる神は乞食の姿をし、弘法大師とされる。また、訪れる神を冷遇した者が罰を受けるという隣の爺型に発展する場合もある。（以下略）

神が乞食の姿をとるという説明は、前節で触れたやつしとよく符合する。またやはり右の説明の中にあつた弘法大師と言へば、「まれびと」として寺院の開基とされることが多いのは周知のことである。翻つて筭山竹林寺のように小野筭が開基または中興とされる寺院の例を寡聞にして他に

知らないが、まさにそのことが、小野篁を「まれびと」に仕立て上げるための必然性であつたらう。本来、弘法大師や行基ほどには宗教性を帯びていない小野篁を寺院の祖とするためには、篁に宗教的な神秘性や聖性を纏わせる必要があつたはずである。いわば、弘法大師や行基と同格の神性を与え説明するための物語として、『竹林寺縁起』の篁一代記は紡ぎ出されたのだ。

小野篁という、本来ならば寺院の祖としての資格を有するとは必ずしも言えない人物を物語の中心に位置づけ、いかにも縁起らしく仕立て上げられた物語——篁の異常誕生が注目され、その特異性に焦点化されることの多い『竹林寺縁起』であるが、その構想は縁起物語の本道に沿った、至極穏やかなものであつたと考えるべきであらう。

注

(1) ①森下「『篁山竹林寺縁起』の世界」(『陰陽路の歴史と風景』溪水社、二〇〇一年)、②同「『篁山竹林寺縁起』における篁説話の位相—その文化史的背景をめぐって—」(『広島文教女子大学人間科学研究所年報』第三号、二〇〇二年三月)など。本稿は、論の性質上、この両論と重なる部分をもつする。

(2) 和田茂樹・友久武文・竹本宏夫編『瀬戸内寺社縁起集』(中世文藝叢書、一九六七年)の友久氏解説による。

(3) 注(1)『『篁山竹林寺縁起』における篁説話の位相—その

文化史的背景をめぐって—」によるが、一部改めている。なお本稿において「前稿」と言うときは、以下この注(1)②森下論を指すものとする。

(4) 『竹林寺縁起』本文は、注(2)『瀬戸内寺社縁起集』所収の本文から、私意により訓読して引用する。ただし、句読点は一部改めた部分がある。以下同じ。これらは、稿者の本文理解を明示する意図に発する処理である。同様の意図により、発話・心内語に鍵括弧を付した。

(5) 前稿参照。広島大学本『和漢朗詠集仮名注』は「此心ハ、野相公カ姿醜キヲ、人笑フ時、作リ也」と状況説明し、「謂ク、人ノヨハイモ、思フニ、生滅不定ニシテ、媚クル姿モ、漸ク老体ト、盛クナルヨハイモ、早ク衰ヘリ。春ハ年年ニ来レトモ、人ハ二度ヒ少キコトナケレハ、時ヲ惜ミ、物ヲ習ヘト云義也」と釈する(伊藤正義・黒田彰・三木雅博編『和漢朗詠集古注釈集成』(大学堂書店、一九八九年〜一九九七年)による)。

(6) 前稿参照。

(7) 学問の競技性あるいは遊戯性を巡って、例えばホイジンガ『ホモ・ルーデンス』(高橋英夫訳、中公文庫、一九七三年)は、遊びの競技性について詳述した上で次のように述べる。すなわち、

おそらく、まえに取り扱った法律や戦争の分野より、さらにはつきりと古代文化のこの同一性(森下注、「すべての競技の初めには遊びがある」という競技の形式の同一性)を物語っているのは、知識、学問の競争の世界であらう。大昔の人にとっては、何かをなしうる、

何かやっつてのける勇気があることは、力を意味した。しかし、何かを知っているということにいたっては、魔力だったのである(二三三頁)。

(8) 承和三(八三六)年には遣唐副使として出発するも難船し、その翌年は命に背いて出発しなかった。なお、菊地真(「遣唐使」の文学―小野篁伝説の形成(『アジア遊学』第四号、一九九九年五月)は、遣唐使としての属性が伝説の形成に関与した側面を詳述する。

(9) 引用は新日本古典文学大系『古事談 続古事談』(岩波書店、二〇〇五年)による。同書の脚注は「白楽天と小野篁を対照的に把える説話は、二人の詩想あるいは詩語が、類似あるいは一致したという形で、江談抄四ノ五や一八に語られている」と説明する。

(10) 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編『和漢朗詠集古注釈集成』(大学堂書店、一九八九年〜一九九七年)。以下、朗詠注の引用はすべて同書による。

(11) 『李嶠百詠』と『百詠和歌』については、池田利夫『日中比較文学の基礎研究 翻訳説話とその典拠』(笠間書院、一九七四年、補訂版一九八八年)に詳しい。

(12) 注(一)『篁山竹林寺縁起』の世界』において、篁、白楽天に行基も加えて、文殊菩薩化身説を検討した。白楽天の受容については、文殊菩薩化身説をも含めて、北山円正『平安時代における白居易』(『説話論集 第十三集 中国と日本の説話Ⅰ』清文堂出版、二〇〇三年)が詳細に検討しており、教えられるところが多い。

(13) 篁官説については、黒木香「小野篁の変貌―冥官説話の変化をめぐって―」(稲賀敬二編『源氏物語の内と外』風間書房、一九八七年)が詳しい。本稿でも別の説話について引用した『江談抄』や朗詠注に触れながら、『竹林寺縁起』の説話も検討され、文殊菩薩化身説にも言及されている。

(14) 引用本文中の括弧内(「在」字)は、注(2)『瀬戸内寺社縁起集』の本文翻刻で同じく竹林寺蔵の模写絵巻により補われた文字である。以下同じ。

(15) 中公文庫版(一九七五年)による。「国文学の発生(第三稿)」の初出は、『民族』第四卷第二号(昭和四年一月)。

(16) 「まれびとのらいほう」の項(三原幸久執筆)。弘文堂(縮刷版、一九九四年)による。

(17) 京都の六道珍皇寺や大和の矢田寺など、小野篁と縁の深い寺院はあるが、いずれも篁を寺の祖としているわけではない。

(本学教授)